

古今和歌集正義

夏

六

7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 6 5 4 3 2 1



古今和歌集正義卷三

夏歌

題一ノ

よみ人一ノ



我やとお池の夜かのよはよ夕を山やとくきくい河うきすん
これうきのう人のよもくかうみとくれ人すらき
絃向ひ此は今や來なうんと有うふ一のゆきとま葉卷
十よ朝霞棚引野邊呂檜木乃山霍公鳥何時來將鳴と云
末句よ今くひく葉葉のひあくよ葉ちる此跡乃いまと夏めり
ぬよ郭云とをひゆくつはく其祐とわきんといづ今此地の
坂などようりハ朝云のくき節よむうきをむ葉なるなれハ

行うとお詫くまよりも本此句内勢ひあらふもしや本な
うんと想むるきを因知一萬葉卷十八數波志美被佐伎也久
見禮婆保等登藝湧奈久信吉登伎尔知可言伎尔家里と
立すひとき意をなすのうちれい二月廿日詠なきハ近村
ふたりとしひ今ハ夏よきへりまたそれを今や本うんとつ
おろつゝれどちかく首れりと。今既んのあり山歌云ハ山乃
歌云山なり歌云ヒテア意たゞく、ま歌云ヒタゞく山歌云
差別うくノ数ひよりす萬葉中歌云ヒトアロヂ百三三十首又
及て山歌云ヒテアハ四百三過もあつよ多ひ必山の用あらず
今も宿は放なこむうそ山の歌云今やと祐つてる也ハ代集ま

てハ大方さんと用ひるの多一母鳥時もきハセリシ雲とも出
くゆめのう更に鶯本ヒ代數ひよ亦到く日數ヒムするもの
なら歌を歌ねとく山歌云ヒテアすとく呼なづきを
歌ふ事ハ其れ部よつて

う門きよせんう機をみくよゆ紀

家てよとをあましよやくとや喜よかくまくひとりさんん
竹枝云歌ヒテア人乃ぞれとく門う詞をあまごれ本よやうを
さくと我じとりひまきんとくやまきとく引くのとくを文よ
さくて母本山とくひ嘆ぬくんとく云ひ也とさりとくんとく機をお
きをよと御月ハ万葉も字能花能佐久都奇多知奴なども

よみく其ころはれを氣アヒなあらしを御花マツツクハナつ木れ花シダレバナをつミ
ふみて日本そぞ中ハタケ心宣虛ムカシをハナ内ナカニ本ホトトグるなりト一イチ花ハ
只シテあまともソシ又アリすもシテ也ハシメりシテとシテ花葉ハナエをハナ事モノはハ氣ヒ
之シテ燃ヤシてもシテ或ハ愛ハシメりシテ也ハシメくシテたシテやうハシメりシテ也ハシメくシテ度ハシメ
禮ハシメあシメきハシメいシメもシテ用ハシメ事モノをハシメらシテされハシメばハシメ其シテ言モノをハシメす
の事モノをハシメやシテ而ハシメ用ハシメ事モノをハシメ一シテ度ハシメしてシテよシテ古ハシメ禮拾遺ハシメ
えシテ天ハシメ晴ハシメの意ハシメとシテ高ハシメ設ハシメ出ハシメくシテ其シテより然ハシメ思ハシメうも
少シテうシテ度ハシメ事モノをハシメ

○遠境アハレ見事ナト云其詞ラシキとシテハ禮ハシメあシメとシテ
あれどシテもシテ禮ハシメ事モノをハシメたシテ度ハシメとシテ度ハシメえシテます

あれと云歌碑ハシメあるシテかシテんや

歌ハシメし

よみゆシテもシテす

さうきまシテかシテとシテまシテうシテもシテよシテ今シテかシテうシテをハシメうシテ
かシテよシテかシテ八ハチ月ツキのシテおん事ハシメうシテもシテお羽ハシメもシテ出ハシメくシテもシテなんシテ
かシテ被ハシメうシテハシテ諸ハシメもシテすシテとシテ高ハシメいシテ清亮サハヤキしシテ中ハシメよシテねシテかシテ
小シテ余額ハシメもシテくシテ入ハシメ三サン小シテ難ハシメ耳ハシメよシテあシメるシテこシテちせシテすシテとシテ
えシテ立ハシメくシテまシテおシテ古ハシメとシテよシテ次ハシメもシテ年ハシメのシテ友ハシメよシテやシテてシテ郭ハシメくシテ
かれうシテうシテうシテのシテうシテもシテ立ハシメ古ハシメよシテのシテ内ハシメ立ハシメうシテくシテ
六ロク皆ハシメいシテとシテあシメよシテまシテん後ハシメもシテ俊ハシメてシテのシテをハシメハシテ極ハシメ者ハシメこシテ
とシテ慈ハシメ良ハシメのシテ御ハシメよシテますシテ教ハシメがシテなシテ皆ハシメよシテ通ハシメれ

の音を形容する所すらもあらずと云ふ事もなれど
○お聞よに此鳥は年々年の老れまゝ衰へて故に古聲と云
せといふが此の謂れの年をいうつてよ

○遠緒は去年ノ殘リノ古聲ヲ出シテトウソ今モナケカシヒ
トヨモ此處に於て年を盡さずして殊一形態タリキアリテ其の
うちれ古聲をとり出で今乍ら人によくやせら事すれども
ぬのをなす事はさま異やうなしすやといひ是をきー古聲
と今もなづなんどいふ事く始より即ち紀氏鷺云々の事
をきくからむれむのをすれどもかくよを發て又云お
羽ふい葉葉^{ウチハフリ}又羽板とまで謂ふと云は譯ハムキリよ

ハヨモ此處大やうハ鳴んとする所につまは鳥も羽をすすり方
葉^{ハフキナクニキ}羽板鳴志^{ヒツコロ}葉すと云ひて今ハホトメアリム事もぢと
ヒ傳^{ハシマ}レテテ云うなどハ此ホ羽をきハ羽刷^{ツクロ}ヒヒテホウル方^ハ
エサ^ハハサウエ^ハ也^ハ其羽をき鳴う^ハセ^ハホノ^ハ也^ハハサウエ^ハ
ハ^ハハサウエ^ハ也^ハハサウエ^ハ也^ハハサウエ^ハ也^ハハサウエ^ハ也^ハハサウエ^ハ
一^ハ天^ハの羽衣^ハもと^ハハサウエ^ハ也^ハハサウエ^ハ也^ハハサウエ^ハ也^ハハサウエ^ハ
ハ^ハ自然^ハの事^ハと^ハハサウエ^ハ也^ハハサウエ^ハ也^ハハサウエ^ハ也^ハハサウエ^ハ
ナ^ハ解^ハさ^ハる方^ハと^ハハサウエ^ハ也^ハハサウエ^ハ也^ハハサウエ^ハ也^ハハサウエ^ハ
も^ハハサウエ^ハ也^ハハサウエ^ハ也^ハハサウエ^ハ也^ハハサウエ^ハ也^ハハサウエ^ハ

六月二日 なまきあらそきん御云あひて此不との事をきつゝや

讀入へし

さうきあらそきん御をもうち花房一をうけハむう北人の神乃うそす
たち花そ或はよしちま花とておもむくらしきをもるい事に
帝の御時田沼間守ニ嘗世代國よりもてゆり一樹有りけりと
アヤセラ事ニモや於考テ一樹ハそれき原壁ハゆふより入内
宿ノ小もヨシく考テ一樹ハ更也其至テアリ其實あてヨシハ植地の
事ん匂ひ乃は木きるハ更也其至テアリ其實あてヨシハ植地の
寂ととす今ハ都より少くして苦れ事時セドリえくアヤセ
東ニ福之彦履踏乃ハ衢尔ニキミ七阿婆乃野之花福之珠

尔拾郡卷十福之林乎殖立キ卷十三花福乎木枝尔毛知引懲
立或モ福乎守部乃五十戸之木ト松ニシテカマセヌ多キモ
初ニコトモク花福レシテシテカロニ其福數多モ中ヨハ一棟こと
モモ花代テ花拂レシテ奇乃ミ五月ツ花拂テ咲匂フ花福内
甚多モナヘハ當なきつる入代神乃ウルヤモ香うすと云ム六月ま
つモ上の六月半の山郭云ヒモトナヒテアリ五月モ花拂得
キナヒのれなつて本草代ミトナム匂ヒ花風のニタヤ
ナリナムケテ花拂はまどなりて今更モ花思ひそつて百
千鳥拂リまよはせ出さん極の匂ひ花ヤモタヒトハうづくモ花

福のあめりて人をなづくと意せれまふと見かへしわせん
なまくいやうく寝るまはやと宿も天地内す一處自然乃時
候也

ハリテキサム六月おぬしん是引出やまやまます。まことなく歌
童をいたれまつまご旅なり浪どもあたれしもれは高ひうちさん
郭云へゆきりゆく里には住なまます。うのびへう旅めくらをまど
旅うけき人のよ思ひすて古より多く旅め行りたまふさり
蜀帝比故事を被り蜀族のみより作よせしろをのせ其族の
さまは付くからむれむくろくひなきを

音羽山を越えり村の歌云ばらくよまき

ものともあり

れとほふとせらえくまを朝云こ生ちふたらゆすまう歌くすら
高羽山の歌よまうんハ被とこめく都とゆくとせやうくの歌
あらこうやくわくする情高うゆりゆくうんきくと思ひて一彼
ハニもく花をのなれたがこそ喬木はやとくせ万葉卷十本高者
カツテキ フエシ ホトキス キナキトヨメテ コヒマサラシム
舊本不植霍公島東陽全響而密令蓋あまく夏山之本末
ノニ、ニ
乃繁尔きく六帖又足寒北山乃情一毫まれたがやくす
く無むうと通すと多くよめり又やうの音と時々なづくせ萬葉卷
十八辛里安加之許余比波能麻年保登等藝湧安ヒ年
アシタハキ フタラン
安之多波奈伎和多良年書あまく保等登藝湧麻豆奈

久安佐那^{アサケ}など嘗てよき人也

新之のちにてなきをかくとぞ

うせい

因とくあはれなくあはせにあちき取めやまくぬゑをうり
彼う初すよ入むづうなれをも今誰となく思ひばされ
感情内おこれとを言ふ事といひて二向素性集六帖ある鳴
ふるさけもとりも是う事一ゆき初すへ因書よりまく
あはれなくあはせにあちき取めやまくぬゑをうり
幸すと云ふ事いふくゆる方あらのとれすを時もなくも
あはれありての古音代神樂よ非きをうかがひ又あはれす

とあらんすは和く鳴きをせんと申く書つては集中此例と
推く如く一治世一首のとよせなく人の多くてしむ數ひり
あらずやもとなくいまた極の所よもやはこの活潑のすこや
きを云てふとはて今こそなりねれやうくのふうつ今ゆ
ねれゆめりゑくがるやめきを云々今を何のこうなむくゆめ
人ゑるようつるを云あちきなくすがまくはくせ向頭よほくあ
ちきなくなどくあはれ治尾よくいせきあらき勢ひのむろ内
ううあはれよりてはぬい向中向まよひと葉葉よむくやまく
とひはるやくとひをなと云ふ別又稱あり

○遠縁^{アラシ}時鳥ノ始メテ鳴聲ヲキケハオモシロウハアレ庄

又サ何トナウ感情力オコツテ無益ナ其人ト定マツタ事モナ
イ恋コ、チカスル又云すハシトハ又セサキナリニの如比改
うつして更テ一おゆうなれど又の主事トテラ皆服也而レキ
老はあちき歌くとつら面あらタシヒトムツカシヒテクサキ
句調ナランや此た彼う照裏アシテラニ感情の發見シと一筋又
ソヒカラキナリセサクテ一つかりうきすまとも又照一
カニキセヒトアヒトカラジランやハシムツカシテ結尾のはあヒ
又セヒ思ひヒトナリシモ強シ其主事ヒトモシナキナギリ也セ
まきハ哉シヒマリ悟リセ形ニ付シモ本の又ハ股キヒ思ふ
テハ急ハ活潑ヒシマリシモ悟リムクセヨリモ無機輝慮活

動ヒタルヒタヒレハシモヒハ立ラモ歎ヒ立ナムヒタヒ
ア代達ヒ有ル更ユ其ヒヒトナヒレヒトモヒア速ヤ
ナリヒタヒの後セリナリヒタムク活潑ヒシマリ新古今
アヌニ至リヒヤヒタヨリ難シヒヤヒタモキテアヒヒ
ル後ヒ出ラモ委ルナ知ニ矣キモ
ナヒシモヒアシヒトムカシヒテ熟ニテ鳴ヒよキル
頭注云此奇其詞ニ良の石ヒモヒトメタる詞
シテモ素良の井ハ添ヒ那也石ヒヒ色那也ヒシホガ
ハ畫ヒモハ漫漫モ石ヒ代都ヒ初ヒヨリテテラヒトモ

又あらねう又石と云ふを拂とトのうひ被石と云ふ居夷ひあれ
ハ立きてり安康天皇石上完種宮仁賢天皇石上廣高宮を
みとのまを立良と云ん事ハされどハセリ事也紀
畧を接するよ素性寧善倭舟立木便殿御院とある又紀氏の集
は臺使失ぬとゆく御垣立とよからる石とあら木垣立とぞす
て山の裏に立ぬとすん御垣近ノ君なむて山の山毛代木の
木を伐ようを立木立木とゆく又浦の木と身をせしえ先
石とあるよな失ぬ君とぞなるかあまたるとつまく幾焉と
らまくとぞく今本と云う代うていとれ文字なまいあやまち
也神中村三郎御注又二石すまくいのうされあよざれ密勘

こそ奈良の石工と二本すまく畫移^{マシテ}と云ふとぞ寺
号也とく有りんとはあれ字をゆきせるハれなむと云ひ古本
の古今集は石と云寺ととの文字あやまちうこうひすら
今抄の刊本は題記の初めのうのうれすとまことのうと
あよでとの文字を脱せり今本比詞書は耳すまくやく書と
うへきの通すと刊本ハ写誤甚ま一古本は耳すよ處アモハ元興
寺と名ぢるにあすり青としは隆ちを斑鳩はあきハいがう
寺などと云類ひ多き事をやく後撰の石ととつすもま
うととくひ古今目録の石上寺之名良因院也とも云れ

是れと此目録の今昔古今の用書よりやまとあらざるを
も彼とあつての事今にひき方はほんとてころ寺とは
記されしとせんく梅林に比るよな良とても冠うたるも
史と後人わざと當時あらき教の事もありとたゞも
大やうな良れかなしすうの用書をもすとくアモハ初代石
上を普通の被ふゆきとよし其方よ思ひなまむとよしと
ヨリトシたとを安(モ)ミヌモセシテアリのモ集中は數ひ
少しことをもかとへ思ひうめうめ事とと貴くん其あひ即ち貞
周院セセムヒ石上の良因院と書アヒトキニテ然レヒ生々
ア部モトシモト西大ち代柿とアムトヨウ滿の院の橘をこそよ

る有とお風の西大吉尼野の諸の庵とばらさる其の端用
を風と譽きいふとあるとす所とうけもみをもじ集申シル然り
さうヒツムカヒ無文をとひのとくせ集の文法也んとほく
アセれたりおととの良因院と西をまゆく業(ヒシ)モ聖を貢
集申難部は津西源磨と云ふと其國とあけは敵の山な
る音羽の山かとせぬとあらざる二而ありおこと其故あ
る事其創(ヒトササ)アセムああひくやしとたうもなみうと
エスヒトアムカヒ難ととめのい常比枕詞の例よやとくの良因院
とくがるよとくがるよとくがるよとくがるよとくがるよとく

とおれ枕をひめと思ひてよやんわどよも用ひて書ふやめ
也又密勘は是を正解の道三案代やと申攝よりと云文字
又解説く石ととよもく併り詞はなれどうめりと書う古き
入へ思ひう多め撰入よかとへゆくとあ良とすまくすれを至
うぬ思ひにあてたを度のるよと書く付也不及不審もと
うく形注を被きれども何事とぞ守りとすをハ疎をうふ
名れやうものと申ればひの事なりを察従とまく度ひく
又聲をとけしと名づけ此都は在く國もとあくと石とあらま
教の財鳥とよかく何が美滿をりて之はん量を石とよあす奈
良比四教也とあるが又何の事ともあれも石とよあれ代枕を

もあちむく其枕の石とやく住西代名す事とうじにゆき
キリシテおきと體なきんとくと祠書はるとあもとあらされ
るつて歸ちとく奉る紀氏鸚鵡と體若比石とあく
住うるとあらうかうねぬとよみあるよ今くひとよも
へなし事端をよめやかとえうれうを度の都代さん
かう一せよあらへ其体済るとこくちりすてもぬよへなまへと
か而とよすきくあ身の遠きをも思やん事すすきも
けもとえことひあきくらん後かと色々花経葉などの面白
らんじよ付くハ數ひなく全盛うやうがこのあわざも思ひよ
すく事省も前の一今い布面のよあよこゆりかくとくを

信一は田島のことをまた完植廣高の教入にてて
つらん苦心多きと思ひやうへと思ひたるや上よりあきをも
宣ふぬ處をもあとよれども人せせや完植の者ぞれす
らみこと眉病の日は弑され強ひが、不_レ御代の礼をうち
やうく其眉病の日を始め向慶_{ツカニ}嘉_{カニ}二皇子より大泊炭
の皇子_{ツチラ}教され給ひ事状のあちまなき又圓の大臣_{オニ}大鳥の
おそれのたへの辯_{シテ}アリ_クかくとも思ひ乍る事も学
なすや何うかなる今わ義を於く_{シテ}す。眞_{マサニ}うつえ
と思ふに其時其也_{ヨハシテ}意をひやりと起_ス事也
今ハ在郷_{シテ}行軍卿の家代_{シテ}被合_ス小夜更_{シテ}布_{シテ}被_スのや

とくに_{シテ}のつるや_{シテ}井_ノをさうりや_{シテ}あるふく_{シテ}同_シとなつて
や鶴_{シテ}の_{シテ}安_{シテ}と_{シテ}すれど遠_{シテ}ぬと思ひ_{シテ}うる
良_{シテ}の_{シテ}と_{シテ}書_{シテ}候_{シテ}不_{シテ}及_{シテ}富_{シテ}と_{シテ}御_{シテ}あ_{シテ}の事
也_{シテ}お_{シテ}食_{シテ}も_{シテ}す_{シテ}御_{シテ}と_{シテ}不_{シテ}れど_{シテ}其_{シテ}度_{シテ}を引
よ_{シテ}と_{シテ}御_{シテ}都_{シテ}お_{シテ}書き_{シテ}うを_{シテ}う_{シテ}の_{シテ}田_{シテ}都_{シテ}
き_{シテ}と_{シテ}あ_{シテ}と_{シテ}す_{シテ}御_{シテ}する_{シテ}と_{シテ}お_{シテ}良_{シテ}と_{シテ}よ_{シテ}
ん_{シテ}の_{シテ}即_{シテ}思_{シテ}い_{シテ}の_{シテ}様_{シテ}と_{シテ}つ_{シテ}か_{シテ}も_{シテ}を_{シテ}御_{シテ}勧_{シテ}す
事_{シテ}よ_{シテ}仰_{シテ}せし_{シテ}御_{シテ}設_{シテ}あ_{シテ}也_{シテ}ア

○ 附載云母石とある木都とほんの木くらハ安_{シテ}天_{シテ}代_ス

工完穗宮仁賀天皇也石工廣高宮代首を思すまわす是
大廟殿代系のあきらの後乃に傳され其心をあくもせん意
又左良のつうれりさまでとて御書とはあくもせとくろへ物也
みるど四事之教とあると完穗廣高の玄宮を忍すまわすと
右は御書よもかれしとじよすむとゆふさんあむとと
を良するもなきととをなほれうのうと書ひなほん
や又云元明天皇和親ニ年に藤原宮より平城へうされく
先仁天皇もと七代の帝すくも全盛なりなほうまくはす
てくちこちお多き奉せたるとなほりとよみ又を慶と帝
名と諱合せたるもありか皆よハ吉事と成りなほ教みを

トシ平城天皇代御可ともと立と仰いなほ教もと義
足後援石とよなうる教のたゞくのをうちふくらむとてんゆく教
御花集難下又千載集神祇又無ひへづるすと東門院三笠
山にて來よりととくよみのうの詔と移すと雪丹集り
まゐのうれ教のまづらと三笠代しとてのこを雪丹集り
うとがを良の教と即ちうの教とようもまくせんらむ教も
えまくつす等や左良の教の全盛のすと大方は、きても候
やしよだく候とさんとまくは説皆候すまつ才一と奉る
後援のすとよぬれを取つてうをあまくろをりとす

て地理のとあるよかとく引出へて見る物を以てやされれを故ゆる
がうちれ都の首よりなまきよからむをひくのれどりゆうすと
後向ふる里の名を石とあくとくを段の施又は御をみ
ちよ今比定とせらうつうの匂れなまきよからむをうよくと
えとまくらへりこは頭ほよせすと暗よ引うつれづれを正さ
きて其ま引するや石とつもいぬを段とてを段とつ
せまくん古奇有くうとあくとづき杜撰の甚しよもを歌泣よ
ばすと引坐とくめたまきと一はよ不審比放よよもくとくを
ゑまくずれハたのアんも更よ發が一又オニヌ拳ノロニ立山
の音ハいたのり上東つ院の後一象流まほの社以事の付一象流

の仮を忍一歩くよすを落ふかく、あらとハ只やるじとさん
名あらじ地名をよむるよあくすまこと石と方枕詞とと母地名
よやとあくニ立山山ちのくからむれき處ゆりりにとハ同一枕も
んありとはちへーれとすれあくひあくまよふとあるとを
あよきソソクやとあうよ寄へく只うとくらんの枕とと知り一
又オニヌ拳ノロ拳丹集のすくまみれあらくつまく三笠の
縁と求めあくすむとて更よ地理をと考へてるまをあうとと
とづのや是たあらの部とあきハ布もの部れ花なま車海な
一を度すとくく布ぬとふとくんさうハしては巣のふ
とくうんと愛宕のふとすととくとくとくとくのまをとく

ハ又ひうくニ差レヒトヨリニ念をもてんうむたシトモ思ひ
やる在れも事歴へ行んよハまよをもてて向さんと達ふす事
キハニ差のシテトトツ方也壁也石山よ拂んよハ太はとさ
レト行く比叡又登くんよハ母をもてて向よへきなうす
シク西一セシ木きハシルく附金代達役ヨク志度の石より
セシ木を良ともシテ徳助更又有事ナリ志度と布施と
ヨリ合せシテ何セモナリ仰せ置をあやしむキス
トミヘ志度ハ何セう只を殿とあり御の疑しきを史さんと
て其先どもももとヨ其先がなきハシム事すとモ確くも引方
リのをうへ、かくシキハ只持ひかづきあわせ

○赤岡又是ハカヒトシを那の石と赤岡又生一石とちと後
志度の赤又遷されそなむれ石とちとシテ放ヨツシケくらモ
トシニシテ非セラ事ウタヌアシテラ事ナガシテハ仰方
ヒテシテ乃対設なり

○遠鏡又石と寺ハ山を船石とよあるを志度と云う事ハ今
の赤又とハ名上れあらまても廣く志度と云う事ハ
壁也ハ今の中丹波中なりを岩山も他ふとハ赤の志度
トシニ敷セヒトツハ此也曾都を今四舍ナリ赤といハ赤の志度
ナシ松木山城一石又アハナリ山城又ナリハ入立する志度
山城の志度と云ふ事更ニ強云ナシす山城の志度と云

2ひと氣のせきりとて捷集をうに一やうん書よ京の老宏
山城の老宏をしてあらび（ノルヤ前）を記すをまつに丹波の老
宮と書ひき事海を又今うへ又數多ろ是都をゆく回
教をもり併し引も教をあらびせかねずものこれと設老
さんと今北宣都と他ふ又遷されくん後それ臣の教より
さん又平安の老宏とさなぐんや甚かやつて有り併なし
てお奈良代とはせくうぬせ今一とくく嘗えます大
都督と他ふよちさんまたじとまをと京北宣都の伏
見京の小栗樋をとせんとすくわらが奈良のさんなり
すよとを廣く引及りそ奈良の石とも、ちくと氣せぬ

かとちてく後今北宣又てあらびひなうん事へう
とすまき事と又ふとゆくとて乃何よつてもゆくすふ
たつからむとひゆるれむれと近くアんあく限ハキシキと内
心ちくと其所又引付くいづれに乃は巣を外の扇士など
、そんハ更也於處くとるをも引よとくあくこつろ教ひ今も
ひとまー右も當方よ麻鶴なる龍波のふなとあり教推モ

色一

歌一

すみ入一

夏かまく雨もころあくへねをよしよしよしきつせそ
おとづれすあじよしけはあきすあおせとぞおとづれ

田島れなきのくとモハモトキはタヌサキナヒテモアツリム
タクシナムトガモト一故マのキミ更ニ思ひ出くモ恋
トムシタ旅マタクカレニシムタマニタムシタムシ
タムシタ

○赤闌ヌ星も旅すとわゆふせむとよく故里をもちま
さうとせといへるも船を放つてあるをいよ、寧まざらと緑へ
タクシハ其夜をもて今思ひ出づるを

○遠鏡ヌ時鳥ノ鳴聲ラキケハ感情カオコツテハナレニ
キタ前カタノ在所ノ事マテカナツカシウ思ハルワイヒ方
ハ壁坂マタソのまとうひ加きてにぎはるハ其夜も旅

一きぬあやかむてたゞそれモキアリ事まずのじき
まくば渡を行ひタクシル更ニサニヒヨリをちえせむ是
事云々すのれくとせあまこほきハナモナヤヒマズレぬ思ふね
おゆひい川カトミタム山乃不とあだうるねせありて、そな
初向れ思ひ出る四句のうしれハヒキナヒシハラシアリトス
旅也平え常磐乃ル代田もあうて、うなくとつあせ常磐の
やくもあくの匂ひとなきるりのを惡乃旅の常磐のみ岩
壁一色ね旅もとよほあらんマ一比ねと思ひてる序セト
知一ふとせくうたゞハ傳はたらかとくとくもとくよひよー者

たがよやうてまとひにせ

○遠鏡又恋シイ人ヲ思ヒタシタ時ニハ聲ヲアケテサワシ
ヤナクワインとひきく云此詩ハともかく新作であるとて
よへきるが、うよせやとひらは此をこなす所あるとおもふ
まも思ひあら事あるとち鶯山の枕とて次第と思ひ出る
ときもかねの處で一などいとば思ひ出る事もあると
おれんと思へばじの事也然もたうろよりこれすハ更
るも、ちく後なり高代おなむ、いとせやえぬ事となま
るゆゑ處く其而ま女を今も卒とせ入と思ひ出る事と
思へるゆゑ墨々と窓あ前とをせぐくよまるとがうご

月古役ヨリも代役也こまをあ同ニ因るの書にてく思
ひゆるゆきりはよく味矣也
夜ハ一ぐなまハんとぬけぬるつゝあらもとのひつをゆうを舞
星ハ精良と能くうそ事とてよめうせきとてハ因モアリて
とづかくよけすとれ島大房ハとひらきらくやまらんぬれ
あれど又とくまう事とゆつるまくもあらとては歌りすも鳴く
すわせ筆采などあら筆書きとよのうせき
月のあらまはまらうまくもあらぎりとなくとめくふるとま
かうしてよめうとひとよかくやをうきよあらわの筆せきもの

（そんちくあるのちくは居るまをかどりますたよきよづけ
とそらは居延フリバらきなうんうふ甚延と居延やうせきよも
事ながれ時もれことそつとぞそくに相なふとまうわうやう
をぎりたゞはうこちあらぬとみそくを種重のけちめある
せむととくのまいたひもともひ縛てほまひなひらひな
とぞえくくは活用すとつも本のまいたふくうを引延る
方より活勢よひりて其ころはあくろく節ちむらへんのや
うじとつるまくさとをもとすとはひと證モテサムと推し給へ
一夢を事にぬよあるをり

○ 修教はたまうさま能とハ因る代物をゆふもうちある

やうよなく心とひをす遠鏡等これよ道の共よ此也
其ね思ふべりとよもひまくしてたまうまやうとおこいひと
然うこのまゆのなうんや推うといひあら人めまくそゆのうよ
や思ひすまくおやうを熟きすまるとくまうとくまうものう
さら車のくらを誰うといひをむせられは是へなく
ちへ付延多く因長くはくく事をす御延といひ方も船也ゆく
きもとづくもせうよせくまよせきなよせかおりつづくゆく
はう方よなまくわゆのうの延の諸々付う内ろをあるよれ
す又ぎりはせのきよあよきる事など本道又ぎりぬ

今さらよいかあらな教ふるやうがなうのとよなけ
みふのまむ

やよやあくふかとくとん我よれ申ますニ侍ぬとよ
すれまゆき

○遠遠ヌワシハモウ世ノ中ニ住アクンタワインヒコロ
服是也承せ申ヌ仕事しぬと云侍んとあすや三匁ヨリ
通セヨのよだよと呼ナシテアラモト初内乃やトア
ヨモ舟ひづりも主をカツワイント解てば云侍んとス
ヤ食するやうとあそびんとくサウ云テタモのまを
ちくわと此一首金の金主をあさの倍勢ヌあくモ

又サウ云テタモたことのさんと同名なりや
寛平歩時をきいおあらす合のう

紀友則

かくよわらひざまと本とくまもあらのくよくつちりん
ねをひざれたわかくまくとす今は運さくせ皆もてあちゆ
らんと云酒もとてのまひをきたつちりんとあらはわ
ぬとあらへ一やうれいひこまく酒比名のとくは船もえを時
候をとてこど六帖の雨乃船もすく夕立晴もえをつま
さみれのすとすとこれおまえやる酒比名なしのとく其
じいひととてはめとまよりこれもあら船もえを

てのえつからぬいたやうゆのあめいあかくよひれゐるすと用
後拾遺は五月ゑと義宣代あ牧のまゝも手付やすじまもあ
一とう思ふとあるうは初句を詠ひうひそとよきよばのよを
ちふるゆせとあらうは初句を詠ひうひそとよきよばのよを
ひハとひづるをきまへてかの面おもてをすなわすまゑみたえを
よじとひづるをきまへてかの面おもてをすなわすまゑみたえを
みれへ近く移り一とみれハ一とねまきゆくとある同一と三
連只歎とひどりても事なきとすあるよ付く思ひこくみま
也後醍醐天皇にいたみれ近い母馬思ひ乱きく鳴ぬ日をす
き五月ゑとけの宮えうむ付不とくあすとや意をきん

五月ゑとなむうとせら月あきだせやうむとぞもやうくれて
六始より月ゑと事なづひつすをそ入る榜の祝ひ嘆ひうけ
等と亂共五月とつあよかくもくゑとせとぞとぞとあくび又移
暉集と那となく五月ゑとみーう根ハ日本みくとぞとぞとぞと
ろさがれのうそとそとそとそとそとそとそとそとそとそと
つ五月ゑと月のやのうそとよたけむれむれむれむれむれ
鳴集と等とほとそとそとそとそとそとそとそとそとそと
富とぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞと
時とまめ代月とまめの晴ととづくとよとよとよとよとよと
おやうととととととととととととととととととととととととと

大江千里

やとくやされ橋をされなくよ本とやとせんかたえゆる群
ののぼりの

夏の本代カニケリあまのむすめは都とすひとあらわすかのう
初向教本カニケリは夏代カニケリよとあるうつすもせんさくすと
宣カニケリの夏のよとあるうつすもせんさくすとくにす
平底官奇合カニケリは夏代カニケリよとあるうつすもせんさくすと
た菅カニケリあお本カニケリよと書らやすくよとくねよ見をうつす
く子細カニケリあう思ひなうてば集カニケリをもつてるすとくわへ
あのくわはせかとく代カニケリ施用カニケリく處の教カニケリすもあらかばやう

くとせのうたなどうますことよだのまほだのま萬よ稚イナノメノアケユ明去
走理キニケリとよる同イナノメノアケユ一と代カニケリすく並カニケリの用ひるすとくなのくイナノメノアケユ席カニケリ
目カニケリもあらかじめあらひる目カニケリく脚カニケリちくくきく目カニケリくせ
ひくあらひる目カニケリはあらかじめあらひく脚カニケリとくもくとく處カニケリを
通カニケリ集カニケリよおあらかじめあらひく脚カニケリとくもくとく處カニケリを
ようひ立カニケリ立カニケリとくもくとく脚カニケリのくもくとくとくとくとく
ひよ志カニケリあうとく方カニケリの事カニケリとく落カニケリすよもくよもくよもくよもく
萬カニケリの旅カニケリの旅カニケリすとく萬カニケリよつひがくせんとく萬カニケリの旅カニケリの旅カニケリす

せり承きにつひのむきと蓋の事又まかぎり教へせをそつば
寛平延喜の頃大がれのじきはよこのものあつてもよこ成へて
さりくはあらはれ根よりこぼりあらはれの今もむきと蓋
あらはれ又ちよびて根より用ひもあるあらはれの後亭子虎の
哥令は頼基あらはれがくへんつきた極もれまたとこと光ても
數えたりがとある剣の柄は右の手をやうとあらせられなうやう
ねうとすくそれとこそむとありつゝやまわもまたそれとも
こめはらうんのやれのあらむのよとすくにとおほのまど
せうされいかこうよとあらはれてちりあきせあまくすり
と書れらる世刊の文と接するふるゆのほあのうとせうこの事よ

よみもくふとくわむとのゆうひまきをひとのこびがゆふ
よやあくまうわよやたら根のとせぬる日よてぬやんぐる根
見とさりくあらきんとせなう一宣のと定方朝臣界朝臣の古
べくよこれと作のとく被席姿よとせとちやえをもとと合を
あやまし奉一株(き)も却く異風とあらはれ持よなれりと
云ふとこれよも當時のあらはれうと推すうとせうの内あ
れのつすやと拂ひてかかへとあら二筋せうよとせうの内
今ハたやうせなくと引きとく祖國をやうせとく紀氏のひ一章
やうあらはれせた基の歌よかとくおおせ事よおすくよ
まれうせやうく亭子虎首をかんむり今よ根とせうあよ根

のあはれのやうながやう事いあす一後撰よ志のくよりて
あー被きうらむなどからを氣せぬ事とされどおこらすまは
旅の愁る日れとまこと何とぞうつひて國乃強とい離
きさかへて渡よつてゐる今くわが方の事とならへ即ち旅役よ
あり、先づは曉をとと書き

○遠鏡は初めのひ文字とかの言ふと詰めのゆきほく詞を
とひるが體をもとまほ裏れぬやうある間のまよかんや
又初めよと詰めはあつてくまあくんやいされば篠のこえせ
る事と又云郭公ノナイタ一聲テ日カサメタカハヤモウ夜カア
ケル志わくを亦聞のやくあとの見とすすけの後り譜せど

モモ眼を是とみる朝の日れを望むるあひやまと
ヤとくぐるみやせんとあくあく、日とつむーあくらと云
葉は木の木つゝへ日れ工つた、それまくかー又或様
夏のよしとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
まくはなとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
短歌とよこすかとくとくとくとくとくとくとくとくと
ひきかて短歌のひつまやのとやまみを侍写其聲をし
を解くまきと語く組んとまき比義法也

うきやとあまたぬゆゑよとあきせとやすくやまゆ

紀林客

夏山にこもへま入やひまふりんじふらむこくわくやとくあ
先キまうせくふよへとくまへ出家遁せへて併程よぬまう
をつる當時祚儒の名家とぞとせがてつ修伝さむるなまきも
を伝ともんある傳也只其を終のようとたれもあひゆりよ
かさり方の離別せまく其教慕比奇諸集よらすむ一
かは奇も夏室すすありて當時の相すまくとてく彼
四月北詔夏安尼ケツケアンゴをよりよせとのれひる入を卒一ひ入りの歎ま
え思ひよきく衆の恋一ひ入やふらむ金おきんとよめくせ管

西よりせうよ金きく一夏中草根郭云高禪入禪門
トアヤ又六指又あへばは行方あいはふなまくや卒一ひ思ふ
入のへんむよまた引金きくかふ一

歌一ひす

よひ入あくも

一夏よりせうよ金きく一夏中草根郭云高禪入禪門
トアヤ又六指又あへばは行方あいはふなまくや卒一ひ思ふ
入のへんむよまた引金きくかふ一

ほらゆき

一夏よりせうよ金きく一夏中草根郭云高禪入禪門
トアヤ又六指又あへばは行方あいはふなまくや卒一ひ思ふ
入のへんむよまた引金きくかふ一

まづおよみと有らきハよむる

又川詠

ほととおととよもとまことねにかたれかとへきとへやはあ
酒くうへなとあらははかゆるふれなどねてへあづれいこも
せぬすちつてを旅するつてをゆくまくすあをけり
ききくを更よこよひ一舟もきこをやよつよふきひよそな
るひくあと傳うなうすやがわ今夜外とくたよめせらんや其
かよなくまよしよまくいはまくいはまくいはまくいはまく
くもあうねどくを旅ひてああああ夜なじぬとくよくすの
かよゆくよくよくよくよくよくよくよくよくよくよくよくよ
くわくよくよくよくよくよくよくよくよくよくよくよくよくよく

夏 二十九

五ハ津村とも思ふ通称也後より代り表はる山猪の名
也

ほくせき

朝云人まのやまのすくねまた我うち山ノ木をまきをまき
たやくはくの山ノ木を朝云のすくねをまきしてよが
朝云のすくねをまきしてよが

又云

由きこれとはすゝむかのものうきせゆすなまくらん
歌云のほよみすすりゆくせゆすなくとふやとすまくらん
と年月じう事くきをつまくらんとるを付島乃どとさんと
ひとまくらんやとひゆきりとくとくとひきとばうきとおはる極めり
こねくらんとすむらんとまくとひきとせんねと因入林の教え居
をまくと要事とあひてゆくがつもの鳴くとまくと林のよ
なくとまくとめとひくとまくとめとひくとまくとめと
さうくまくと今とばくとあらと安まくとうべれ
うまくとまくと枕のとまく葉卷十寫ウクヒスノカヨフカキネイワノカキ
コトアレヤキニカキベサヌ
事有哉君々不本意とあるよりれおわら其御花とせよあそ

さく付島乃白いとすすりあせの序のとまく

○遠鏡よトイフ事テ世中カウイト云テ外花ノアタリ
へ来テアノヤウニオレト同シヤウニ鳴テクラス事ヤラトミ
カハ此也御花乃モ只うと、さんれあり事葉葉又よやもぬ
らきこも御室のうちりよ來く付島付島へらを事とお
りのたまをすとハ世中よ鳥とるらんとつむりありと
音調自然よれたりありと

たちの内音をひくよれる　傳正遍照
はちす葉せよよよまめにとなくへ音をひくあきむく
はゆればひじうやうかとあひてゆとあすやうねあらの

名蓮華葉卷十三輪池之蓮葉尔停有水之健房毎因卷十六
ハチスハニタマレルミツノタニニラニミン
蓮荷尔停在水乃玉尔似将有因本と有く置盡の如く

大さくもなきるがたうめの足水とまくあとひとく六根
よまめよむきわら蓮荷むかへる人れむとうみるともも
病あつまつてゐれゆをなせりと其のゆきとせうのるん
とくせんの根とあへ今せら病をあきたからく同せやくもと
生ちなきるとまじめは清潔なるゆきゆくとせうのるん
ア欺くうどん常は蓮をせまゆくとせうのるんとせうの
ゆきゆくとあくわくれをひくとじけりあきゆくとせうの
ゆきゆくとあくわくれをひくとじけりあきゆくとせうの
ゆきゆくとあくわくれをひくとじけりあきゆくとせうの

ヨツヒヲス一と云ふ船を此すとさるすもとあるとアソモ
くす車ならとつて文集の行露椎圓豈是殊とつても
霧あらまつて一念殊とすぞとさり

因れかずかづるをたる來りのたゞかよひる

ふうやふ

夏のよだまよひすのうらあめうとせうつては月やとくらん
是ハ納涼のすとくせん三叶の花をもとめた夏のまゝ入
うち日は照すのうほりのうめくとせうつては月やとくらん
す夏の夜はやくとせうつては月やとくらん

きやとくらんとせうつては月やとくらん

すうんとあつづなみのうづの風く面白いか

○ 鈴木は今書はまへまへと書かへるまほもあはとま
ちうたえでまへすて半をよどむそしむすんとあひ
やかめよかとあすきはまほだやとまへあらんり雪
まと夜のめなれはほたのじふわとまへんといふ共
よ非也面白うをきく夜晴方よかとあるはやくくゆを
お波涼ひさませかくはくく後報出へきおとづゆひだる
やうれきすまへんや

○ 遠穂はア、ヨイ月テアツタニあく西ノ方ノ山マティイキッ
ク間ハアルマイカアノ暁ノ雲ノトコラニトマツタ事ヤラヒ

高ハ歌とももいきまへますまへとててとまへ事や
らなどちがまへるはせよとこ風をかきそと一まひあひう
さあ小思へるは詞書よとくはいも更やこせきのいづ
かせひつとくはまへかまきせんせんせんせんせんの
さまなみをやか一金板はまめひととせせかがわとてそほ
きあなれたいわがいはこあをまかとせんせんといひはれり
筆競落墨はまくれる比縛也
こかくよつてこ取つてをこひりおこきくられをさ
きくこれをよろそぼりうりきる

ちやとさよまわーとせぬかより妹とまのねう麻衣の前
妹とつむと二入ゆる麻衣なしハ若をすまかりとすまわ
えきく人よだまつまやあう隠うつなり花はあくもとくふや
端もんを其まつづくうち蘭てぬ中ひりたたはせば
すれ心遠鏡とすめらとく一やく端鏡ハすれをすほほ
く書くれとまへとハ若をすまのりしるべ一川くとりとんも用
かりきを被まつよ邊よりなりとことこれハ其の端くなまやと
あきくろ邊々れとぎそ世前をよみととあらく其花を
つうじとひなまきと端こなのうよみがくよほく心トヌミ
のうふー六指又同人妹とつるぬ麻衣の花をまきもなく人
あもゆるや

たみさんねうハとあるはいはすなりー母集をすまゆく時優なる
方よながきれーうしん集弟ひ數多くには麻衣のるよ思ひよ
せく妹とゆる体なれハ大よを人よんもくぼなーすと只其先
つるんれ甚ーうとひく折くやうまくさきをだんぢーせ今ハ其
度よ葉を思ひうれ其葉くすみーと思を人よほのとすくきを
らすと今一層乃んをかくきーとされど其葉を、そんとすす方
よ引きくなーとせんはんはんせーと思を人よほのとすくきを
ありてよーとせんはんはんはんせーと思を人よほのとすす方
のまくなれハトをあくとすてあくとすくゆーおうお
あもゆるや

○ 旅枕より夏をあわべてちゑの宿はあるがくよす只常より
えんすやあ葉ガ十七家持立山賦ヨリし門のせれきふはせ
こなつま雪そりあまくさきと有ヒト月日経セテ夜ハ夏まで
よき林をすくわあきハ然シモレベ更セ立山の雪を友あるをめ
つゝじより夏をあくわがまとせとせとせとせとせとせとせ
氣あうを常ヒトシムセシテカクセシテカクセシテカクセシテ
それ日のほこゆればよむる

夏ヒ林ヒのきくふをばうひちハセスモ風やきくら森
みす日ヒセヒよきを戀異よかきく水なきみをあすきらを
なを川キムカヒ用ヒルあきせ日おつこゆればあき日一もあき

なん林のすん日ヒセスモ風やきくら森
らんうえハやうく涼ヒ風やきくら森をあきくさうこう
よもくなんぞをあひのせおひやまくら

○ 遠達は云今晚クレテユク夏ト来ル秋トイキチカウ空ノ通
リ道ハソノ夏ノ通ツテユクハ一方ハマタ暑ウテ秋ノトホツテ
クル片一方ハス、シイ風カフクテアラウカイヒミ除ハ帰セ
すハ只涼一もさのみ詠うひそ西ヒやうくを戀乃は晴思ふト夜
よもくと日ヒセヒよきを付アタタハ異をこすまへをもくられ
た片一方ハマタ暑ウテの一句不用セモ引ヒリノレ御祖又例
また寂初マア、暑イ事哉などあまくませ、涼ニ其涼イ風

カコニモハヤクフイテコイテトモ何と有ヘタスヌ文文部の事
ニトモアムラムト思ヘルハ其事を得シテムの事く、その事
トヨシニテモ力能の事キタリエ

香川景樹大人著述

新學異見

六十四番哥結

うす歩大人判歌結

中空乃日記

百首異見

桂園一枝大人歌集

拾遺

前編拾遺合冊袖珍本

古今正義總論序四季部九冊既刻

土佐日記創見

萬葉集據解

活言考

大ぬき中川自体述

一一三五五三五一一一一
冊冊冊冊冊冊冊冊冊冊冊冊

同既同近既 同同同同同同既
刻 刻 刻

東鳩塾藏

嘉永三年庚戌春發行

日本橋通壹丁目
芝神明前
須原屋茂兵衛

私所書林

同 江戸 大坂 皇都 出雲寺文治郎
心齋橋通北久太郎町 河内屋堯兵衛
三條通高倉東工入

芝神明前
岡田屋嘉七

日本橋通壹丁目
心齋橋通北久太郎町

萬葉和歌集	拾穗抄	全二十冊
山常百首	本居太平大人著	傍註
堀川院百首	中本	同上
同治良百首	中本	薄葉摺冊
和歌伊勢海	全三冊	同上
十六夜日記	小本半裁本繪入	全三冊
同残月抄	萩原廣道大人述	全三冊
源氏物語	大本	全三冊
秋夜長物語	大本	全一冊
和歌御書物所	京都三條通塚町	和歌御書物所
私所書林	出雲寺松栢堂	私所書林

